

標準化する「放浪」

—ネパール・カトマンズにおける日本人宿の形成過程から—

Standardized “Wandering” :
The Formation Process of Guesthouses for
Japanese Travelers in Kathmandu, Nepal

大野 哲也*

要 旨

本論文の目的は、ネパール・カトマンズのタメル地区にある日本人宿の形成過程を明らかにすることで、他の旅行者が行かないルートをあえて旅することに存在意義を見出してきたバックパッカーが、皆が同じルートを旅し、同じ宿に宿泊し、同じ旅の経験を消費するという、マス・ツーリズム化へと変貌を遂げた、そのメカニズムを明らかにすることにある。

そのために、まず第1章で、なぜ、いま、この問題を考える必要があるのかを説明し、第2章で先行研究を概観した。

第3章では、世界各地には当該地域におけるバックパッキングの拠点となるバックパッカーズ・タウンが形成されているのだが、その中でも特に、グローバリゼーションの影響を受けて劇的に変化しているタメル地区の形成過程を明らかにした。

第4章では、タメル地区に滞在する日本人バックパッカーが実際にどのような旅を遂行しているのかを、彼らが語る旅の経験と、筆者が見た彼らのタメルでの日常から再構成し、現代型バックパッキングの内実について考察を

* 立命館大学文学部非常勤講師

進めた。

第5章では、日本人バックパッカーが宿泊場所をいかに決定しているのかを、日本人バックパッカーから絶大な支持を受けているガイドブックの分析から紐解き、第6章と第7章では、ある日本人宿の誕生から現在までの変遷を、現地社会に生きる人びとの生活実践という視点から再構成した。

第8章は結論として、日本人バックパッカーと現地社会に生きる人びとの相互行為によって現代型バックパッキングがマス・ツーリズム化してきていることを指摘しながら、そのような構造化の過程にあるバックパッキングの現代的な存在意義を、先行研究とは異なった観点から展望した。

Abstract

The objective of this article is to elucidate the formation process of guesthouses for Japanese travelers in the Thamel district of Kathmandu, Nepal. In doing so, this paper aims to clarify the mechanisms by which backpacking, in which people have found their *raison d'être* by daring to travel on routes that other travelers do not pursue, has transformed itself into a kind of mass tourism, in which everyone follows the same routes, stays in the same guesthouses, and consumes the same travel experiences.

In order to so, I first explain in Chapter 1 why we need to consider this problem at this time, and in Chapter 2, I provide an overview of previous literature on the subject.

In Chapter 3, I note that “backpackers’ towns” have formed throughout the world as bases for backpacking across the globe. In particular, I focus on the formation process of the backpackers’ town in Thamel district, which has changed dramatically under the influence of globalization.

In Chapter 4, I use the travel experiences that Japanese backpackers staying in the Thamel district talk about and my own observations of their

everyday lives in Thamel to reconstruct the kinds of travel that they are actually pursuing in order to examine the details of the modern-day backpacking

In Chapter 5, I analyze the guidebooks that are tremendously popular among Japanese backpackers to find out how they decide on their guesthouses. In Chapters 6 and 7, I reconstruct the transitions that a certain guesthouse for Japanese travelers has undergone from its origins to the present day in terms of how the people living in the local community live their everyday lives.

My conclusions are in Chapter 8. I point out that modern backpacking has been transformed into mass tourism through the interactions of Japanese backpackers and the people who live in the local community. Furthermore, I also look at the contemporary *raison d'être* of backpacking, which is in the process of such structuralization, from a perspective different from that of previous research.

キーワード：バックパッキング、標準化、タメル、ゲストハウス

Key words：backpacking, standardization, Thamel, guesthouse

1. はじめに

現代日本社会において、1964年に「解禁」になった海外旅行は、長いあいだ、一般の人々には手の届かない憧れの存在として君臨していた。しかし、1年間に海外に出かけていく日本人の数が1,700万人を超えるようになった今日、人々にとっての海外旅行は夢や憧れから、日常生活を彩り、心身をリフレッシュさせる「当たり前」の実践の一つへと変貌を遂げた。

こうした海外旅行の一般化と大衆化を牽引したのは、間違いなくパッケー

ジツアーに代表されるマス・ツーリズムだった。マス・ツーリズムは、誰もが、安全・安心・安価に異文化体験ができる観光システムとして人々から祝福され、高度経済成長、バブル景気、円高、グローバル化の進行などの社会変化にも適応しながら、日本社会に深く広く浸透していったのである。

だが、このフォーディズム的観光形態は、大きな問題も孕んでいた。一律的、一方的、かつシステムティックに現地の文化や環境を蕩尽してしまう大量生産・大量消費型ツーリズムは、ホストとゲストの不平等な関係性が土台になっているとして、植民地主義の新しい形態にはかならないという論調が登場してきたのである。1970年代から80年代にかけて、マス・ツーリズムに対する批判が高まるにつれて、それに代わる新たな観光形態を模索する動きが活発化していった。

そのような社会的風潮のなかで、イスラエルの社会学者・人類学者エリック・コーエンによって「発見」されたのが、バックパッキングだった(Cohen 1972: 165-182)。①長期間、②最低限の予算で、③いきあたりぱつたり、④路線バスなどを使って現地社会に埋もれながら進んでいくという放浪型の旅が¹⁾、現地社会に過大な負荷をかけず、現地の人々と対等な関係性を構築できる観光形態として一躍脚光を浴びたのである。以来、オルタナティブ・ツーリズムからサステイナブル・ツーリズムへと観光の理想型が変化しても、観光研究のアリーナでは、一貫してバックパッキングに高い可能性を見出してきた。

しかしながら、本稿では、この言説を再検討してみたいのである。というのも近年、バックパッカー人口の増加に対応して現地社会が観光戦略を精緻化することによって、バックパッキングのルート、宿泊場所、旅の経験などが標準化してきているからだ。マス・ツーリズムの対極にあったバックパッキングが、マス・ツーリズム化してきていると思われるのである。

このような筆者の「素朴」な実感をスタートラインとして、本稿では、「放浪」が標準化するというアイロニカルで矛盾をはらんだ現象が生起するメカ

ニズムを、日本人バックパッカーを事例として考察を進めていく。特に本稿では、コーエンが指摘したバックパッキングの特徴である「常道をはずれる」(Cohen 1972 : 165-182)、つまり他の旅行者と同じルートを旅しないのならば形成されるはずがないバックパッカーズ・タウンに照準を合わせて論を進めたい。具体的には、バックパッカーがいかにして一つの宿へ集結していくのか、すなわち日本人宿の形成過程を解明したいのである。なぜなら、バックパッキングのマス化現象の象徴が、彼らが集い、滞在し、「これからどこへ向かうのか。次の町に行くにはどの交通機関を使うのか。次の町ではどこに宿泊するのか」という旅の微細な情報を収集・交換・発信するバックパッカーズ・タウンと、彼らが実際に滞在している宿泊場所であるからだ。「放浪」の標準化には、バックパッカーズ・タウンと日本人宿が大きな役割を果たしているのである。

この考察によって、従来とは異なった視点からバックパッキングの新たな可能性を展望してみたい。

2. 先行研究の検討

まず、バックパッキング研究の転換点になったコーエンの論を確認することから始めよう。コーエンはインターナショナル・ツーリズムをツーリストに対する観光産業とホスト国との関係からとらえなおし、バックパッキングを「非制度化された形態の観光 (The noninstitutionalized forms of tourism)」、マス・ツーリズムを「制度化された形態の観光 (The institutionalized forms of tourism)」として両極に対置した。当時はまだ「バックパッカー」という語句は生まれておらず、コーエンはそのような旅人を「漂流者 (The drifter)」(Cohen 1972 : 165-182) や「遊動者 (Nomads)」(Cohen 1973 : 89-103) と表現した。そして「常道をはずれる (furthest away from the beaten track)」、「現地の文化に浸る (He is almost wholly immersed in

his host culture)」(Cohen 1972 : 165-182) という、バックパッキングの二つの特徴を抽出した。

こうした二分法的問題設定は今日では「当たり前」のことではあるが、大量生産・大量消費型のツーリズムが疑いもなく全盛だった時代に、バックパッキングという旅のもつオリジナリティや個性・私化された志向を重視する姿をフォーディズム的観光システムに対する対抗文化に位置づけ、高く評価したコーエンの分析には大きな歴史的意義があった。

たしかにコーエンが抽出したバックパッキングの「常道をはずれる」、「現地の文化に浸る」という二つの特徴は、「都市の論理で一方的に眼差されてきたホスト地域（多くは農山村や発展途上国社会）の文化的アイデンティティを尊重し、地域の環境を保全しながら相互に対等な立場で交流する」（古川・松田 2003 : 18）というオルタナティブ・ツーリズムの理念と親和性が高かった。「常道をはずれる」、つまりマス・ツーリズムでは行かないような場所への冒険心の発揮がバックパッキングのエッセンスならば、一つの地域に過大な環境・文化・社会的負荷をかけることはない。また「現地の文化に浸る」という志向性は、ホスト地域を一方的に好奇の対象として眼差すという非対称性を回避し、見る側と見られる側の平等性を保証する。ホスト社会にとっては環境と文化の大量消費と破壊が免れ、ゲスト側にとっては現地の「真正」な文化を体験できるという点が、バックパッキングの新たな社会的意義となっていた。

こうして、コーエンが「発見」したバックパッキングは、観光研究の主要な研究テーマの一つとして注目されることとなり、多くの研究者によって分析されるようになる。旅人は「放浪者 (wanderers)」(Vogt 1976 : 25-41)、「徒歩旅行する若者 (tramping youth)」(Adler 1985 : 335-354)、「国際的な長期貧乏旅行者 (international long term budget travelers)」(Riley 1988 : 313-328) などと様々な表現をされつつ、いつしか「バックパッカー」へと表現が収斂していった (Uriely, Yonay and Simchai 2002 : 520-538)。

だが、旅人の名称は変化していったものの、観光研究のアリーナでは、コーエンが見出したバックパッカーの二つの特徴だけは一貫して共有されてきた。バックパッキングは、マス・ツーリズムに対するオルタナティブな観光形態として高い評価を与え続けられてきたのである。

しかしながら2000年以降、「常道をはずれる」ことに意味があるはずのバックパッキングが、マス・ツーリズムと同様に行動が画一化してきて、旅そのものが商品化してきているという指摘がなされるようになってきた（たとえば大野 2007：268-285）。これらの研究では、現地社会の旅行会社がバックパッカーに最大限の自己選択権を与えながらも、彼らを会社側が用意したツアーに参加させ、ツーリスト・バスに乗車させるというような、バックパッカーを現地の観光システムに誘導・包摂するための巧妙な戦略の数々が明らかにされた。バックパッカーに旅の主体性を最大限に付与する観光システムを構築することで、会社側は経済的利得を確保することができ、一方バックパッカー側は、安全・安心に冒険できるという点が、バックパッキングの新たな社会的意義になっていったのである。

あたかも巨大な生簀^{いけす}で自由に泳ぎ回る養殖魚のような現代型バックパッキングの内実が暴露されていったわけだが、先行研究で欠けているのは、バックパッカーと現地社会で生を営む人々が、観光という実際の場でどのような相互行為を繰り広げているのかという微細な視点である。いくら精緻なバックパッキングの観光システムが構築されようとも、また、いくらバックパッカーが安直な旅を欲望したとしても、両者の対面的相互行為がなければ旅は標準化へと駆動していかない。実際の旅の現場でどのような微細な相互行為が行われているのかを明らかにする必要があるのである。

3. バックパッカーズ・タウンの形成

世界の各地、特にアジアにはバックパッカーズ・タウンと呼ばれる地区が

ある。世界各国のバックパッカーが集い滞在しているその地区には安宿、旅行会社、食堂、インターネット・カフェ、土産屋、両替屋などがひしめき合っている。そこはバックパッカーにとってのオアシスであるばかりではなく、旅に関する微細な情報を旅人同士で交換・収集するコミュニケーション基地、すなわち情報の共有装置でもある。

タイ・バンコクのカオサン、ベトナム・ホーチミンのファンゲラオ、ネパール・カトマンズのタメル、インド・コルカタのサダルといった地区がアジアの代表的なバックパッカーズ・タウンである。バックパッカーの欲望のすべてが満たされるように作りあげられたバックパッカーズ・タウンは、現代世界におけるバックパッキングの標準化を象徴している。

本稿では、こうしたバックパッカーズ・タウンのなかでも、近年のグローバル化のなかで急速に変貌を遂げているネパールの首都カトマンズにあるタメルの歴史的な形成過程をみていくことにしよう（図1）。

ネパールは1951年になってようやく鎖国政策を転換し世界に向けて扉を開いた。最大の理由は国家の近代化を進めることにあったのだが、そのための

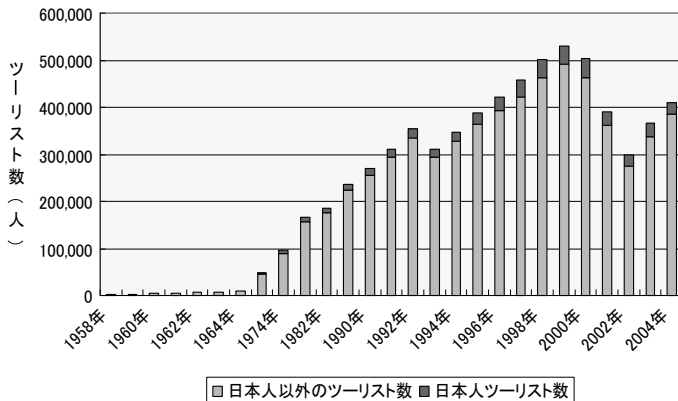


図1 カトマンズの概略図

外貨獲得の手段として利用したのが観光だった。というのもネパールにはヒマラヤの高峰、ブッダの生誕地やヒンドゥー寺院などのエキゾチズム、安い物価というように、ツーリスト、とりわけ欧米のツーリストをひきつける魅惑的な条件が揃っていたからである。

そのような魅力に敏感に反応したのは、まず欧米のヒッピーたちだった。政府はドラッグを合法化してはいなかったが、あらゆる種類のドラッグを簡単に入手することができたことも（下川 1997：38-61）、その要因として挙げることができる。カトマンズの人気は非常に高く、1973年頃にはヒッピーたちのあいだでモロッコ・マラケシュやインド・ゴアと並んで「三大聖地」と呼ばれ、欧米のヒッピーにとってユーラシアの旅の最大の目的地になっていた（沢木 1994：121-39）（図2）。

ヒッピーが滞在していたのは政府が高級観光地区として整備を進めていた



ドラッグを「解禁」したことにより、70年代に多数のヒッピーたちがネパールに流入してきた様子が、このグラフからもみとれる。Ministry of Culture, Tourism and Civil Aviation [2004]とNational Planning Commission [2005a]をもとに作成。ただし1958、59、60、61、63、64年については日本人ツーリスト数の統計がとられていないため、グラフでは、日本人ツーリストも「日本人以外のツーリスト数」に含めている。

図2 ネパールを訪れる観光客数の変遷

ダルバール・マルグではなく、ダルバール広場につながるジョッチェン地区、通称フリーク・ストリート周辺だった。というのは歴史的にはここが町の中心だったので、安宿や食堂がすでに点在しており、彼らのような貧乏旅行者を受け入れる素地が、唯一備わっていたからである（写真1）。

その後、ヒッピー・ブームは終息していったが、彼らの一部はバックパッカーへと生まれ変わって再びネパールへ押し寄せてきた。そしてバックパッキングが世界的な現象になるにつれて、バックパッカーの増加をビジネス・チャンスとして捉え、観光業に新規参入しようとするネパールの小資本家たちも増加していった。

しかしながら、ダルバール広場周辺はすでに立錐の余地もないほど建物が密集していたので、新規に観光業に参入するのは物理的に不可能だった。新規参入を目指す小資本家たちは新たな場所を探す必要があったのである。その小資本家たちが目をつけたのがタメル地区だった。タメルはカトマンズの



当時はこのようにハシシが公然と売られていた。（アムリット・バジュラチャリヤ氏提供）

写真1 1970年のフリーク・ストリート（カトマンズ）

中心に位置していたにもかかわらず、雑草が生い茂る荒地だったので地価が安かったというのが、単純ではあるが重要な理由だった。1968年にタメルに初めて「カトマンズ・ゲストハウス」という名前の安宿がオープンしたことがきっかけとなって、食堂や商店などが次々と開業していき、バックパッカーにとっての憩いの場所へと大きく変化していった。

1989年のベルリンの壁の崩壊とともに民主主義と市場経済システムがネパールにももたらされたことで、タメルの発展はさらに加速した。グローバル化時代の幕開けとなった1990年代だけで、実に100軒以上のゲストハウスが開業したことが示すように（Morimoto 2007）、小資本家たちが経済的な成功を夢見てバックパッカーで賑わうタメルに殺到したのである。

観光に国家の将来を託したネパールの「来る者は拒まず」という基本姿勢は徹底していた。ドラッグ目的のヒッピーやバックパッカーも、ヒマラヤを目指すクライマーも、ヒンドゥー寺院を観光するツーリストも、外貨を落としてくれるという意味で皆が等しく「ツーリスト」だったのである。そしてネパールの観光ビジネスにとって、欧米や日本から異国情緒と冒険を求めて流入するバックパッカーと、それを収容するバックパッカーズ・タウンとしてのタメルは、まさにビジネス・チャンスの象徴だったのである。

現在もタメルは「ここ5、6年で建物が上に伸びた」と人々が驚嘆するほど、キャパシティを増大させながらその範囲を外縁へと拡大し続けている。1968年にわずか一軒の13部屋からなる安宿の開業から始まったタメルは、約30年の時間を経て1キロ四方にまで膨張し、2005年時点で、旅行代理店379、雑貨店254、工芸品店238、カーペット屋184、飲食店136、ネットカフェ134、ホテル131、宝石店93、マッサージ店73、荷物取扱店44、銀行36、航空会社6、百貨店5を擁する巨大なアミューズメント・パークへと変貌を遂げたのである（Thamel Tourism Development Board 2005）（写真2）。



世界各国からやってくるバックパッカーで賑わうタメル。現在では、タメルの「異文化」ぶりがネパール人にも受け、家族で食事や買い物をする姿も多く見かける。(2005年8月18日、筆者撮影)

写真2 2005年のタメル

4. タメルで沈潜する旅人

ひとくちにバックパッカーといっても、旅のしかたは個々人によって大きく異なっている。旅する地域、旅の期間、旅の内実などは千差万別だ。とはいうものの、すべての旅人が自由奔放にオリジナリティ溢れる旅をしているというわけではない。おおまかではあるが、彼らを二つのタイプに分けることはできる。

一つは、「移動型バックパッカー」である。移動型とは、可能な限り多くの国や町に行くことに喜びや価値を見出すタイプのバックパッカーを指す。多くの人が抱くバックパッカーの一般的なイメージは、このタイプであろう。移動型の典型は、たとえばガイドブックに掲載されている「見どころ」をす

べて「制覇」することを目標にしたり、移動し続けること自体に充実感を得たりする。

もう一つのタイプは、「沈潜型バックパッカー」である。沈潜型とは、移動にはそれほどこだわらず、気に入った町で長期間滞在し、その町に「溶け込む」ことに喜びを見出すタイプをいう。ビザの取得や病気療養というような特別な理由がないにもかかわらず、一つの町に長期間居続けてしまうことをバックパッカー用語で「沈没」という。この言葉には、怠惰なニュアンスが含まれているのだが、そのようなイメージと重複する部分がこのタイプにはみられるので、本稿では、沈没している者も含めて「沈潜」と呼ぶことにした。「長期間」がどのくらいの日数を指すのかは個々人によって異なるが、時には数カ月に及ぶ場合があり、そのようなバックパッカーは、町での滞在を「旅というより生活だ」と感じることもある。移動型が「浅く広く」をモットーにしているのならば、沈潜型は「深く狭く」をモットーにしているといえるだろう。

本稿では、移動型よりも旅のマス・ツーリズム化に結びつきやすい沈潜型に焦点を当てて考察を進めるが、これには理由がある。なぜなら、沈潜型が一つの宿で長期間滞在することによって、彼（女）の周囲に日本人の輪ができ、いつしか日本人が一つの宿に集まりだすという現象が生起するからである。こうして形成された日本人宿が情報の共有装置として機能することで、集積された情報を求めてさらなる日本人が集いだし、結果的にバックパッキングを標準化へと駆動していくのである。

本節ではまず、タメルで沈潜していた二人のバックパッカーを取り上げ、彼らの「動かない旅」の内実を再構成しながら、沈潜型がどのような旅を遂行しているのかを確認しておこう。

(1) タスローの苦悩と、そこからの解放

2009年の6月に日本を出たタスロー（1972年生まれ / 男性）のタメルでの

生活は、私が調査をした2009年8月の時点で、すでに2カ月になろうとしていた。私とタスローは、タメルの日本人バックパッカーのたまり場であるアティティ・ツアーズ（後述）という旅行会社で知り合った（写真3）。私は、日本人バックパッカーの調査のためにほぼ毎日アティティ・ツアーズに顔を出していた。一方、おしゃべりでユーモアに富むタスローは、集まってくる日本人バックパッカーの中心的存在だった。頻繁に顔を合わすので、調査という目的抜きで、自然に私と彼は話しをするようになった。

会話をしたり一緒に食事に行ったりしているうちに、タスローの旅行スタイルが非常にユニークであることに気づいた私は、次第に彼の旅物語が知りたいと思うようになった。しかしタスローの返事はいつも決まって「それは結構です」で、バックパッカー同士では気軽に行われるメールアドレスの交



「日本人交流サロン」のという看板どおり、ここがタメルにおける日本人バックパッカーのたまり場である。現在、店は、道路を挟んだ向かいのビルに移転している。（2005年8月21日、筆者撮影）

写真3 2005年のアティティ・ツアーズ

換もあっさりと拒否された。タスローのことを気さくな人物だと思っていた私は、このギャップに逆に強く惹かれるようになっていった。

私のタメルでの滞在が10日を過ぎたときに、私が見たタスローの一日は、おおよそ次のようなものだった。

その日の朝は9時ごろに起床したらしい。起きると安宿から5分ほど歩いたところにある日本料理店に行き、納豆やみそ汁が付く朝食とビールを注文した。日本の新聞を読んだりして、ゆうに1時間以上を店で過ごしたあと一度宿に戻り、午後になってアティティ・ツアーズに向かった。アティティ・ツアーズでは、いつものように他の日本人バックパッカーと合流して、雑談をしてのんびりしていた。昼の遅い時間になると、近くの日本料理店に行き昼食をとり、その後はタメルを散策したり、インターネット・カフェに立ち寄り、適当なコーヒーショップに入って時間をつぶしていた。

夜はほぼ毎日、再びアティティ・ツアーズに戻ってきて、居合わせているバックパッカーと晩飯を食べに繰り出していた。食後はバーへ飲みに行くこともあった。

このような毎日を付き合ううちに、私はタスローが陽気にふるまうその裏で、実は複雑な感情をもって旅をしているということに、ぼんやりとだか気がついた。彼の陽気さの陰に、深い悩みを見たような気がしたのである。彼の葛藤を感じた私は、逆にもう、聞き取りをさせてほしいとは言い出せなくなっていた。ところがある日、タスローと昼食を食べていたときに、突然、彼のほうから自分史を語りだしてくれたのである。なぜ彼が私に話をしてくれたのか理由はわからない。しかしその口調からはいつものひょうきんさが完全に消えていて、だからこそ私は、彼の心のなかにある苦悩を垣間見たような気がした。以下は、そのときタスローが語ってくれた彼の旅物語である。

タスローは19歳の時に専門学校を中退してから現在に至るまで、間断なく旅を繰り返していた。何度か仕事に就いて安定した暮らしを営もうと試みた

こともあったが、いずれも長続きしなかった。勉強が苦手でコンプレックスをもっているの、周囲の人と自分を比較して自己嫌悪・自己卑下してしまい、仕事が嫌になるというのが彼の自己分析だった。そして仕事で躓くたびに、旅に出て心機一転しているのだと語った。さいわい実家が裕福で経済的に困ったことはない彼は、就職活動と長期の旅行をくりかえしていた。

こうした背景も一因になっているのだろうか、タスローの旅行スタイルはきわめて特異だった。彼はいつも小さなバッグをたすき掛けにしていたのだが、そのなかには350万円分のトラベラーズ・チェックの束が無造作に押し込まれていた。長期間、バックパッキングの調査をしてきた私だが、これほど高額なトラベラーズ・チェックを常時持ち歩いているバックパッカーを見たことは一度もない。「いつもニコニコ現金払いが、家の方針」なので、現代型バックパッキングではすっかり定着した観がある ATM による現地通貨の引き出しも、カード払いも彼には無縁だった。今では寂れてしまったトラベラーズ・チェックを、彼は律儀に使い続けていた。

私には、彼がトラベラーズ・チェックを両替しては、湯水のごとく散財しているように見えた。朝からビールを飲んだり、語学学校に入学したり、友人に食事を奢ったりする。ディスコに繰り出してフランスワインを豪快にありながら踊りまくり、酔いつぶれて前後不覚になって友人に宿まで担がれて帰ったこともあった。いかにもバックパッカーらしく、1泊350Rs（2009年8月現在、1Rs＝約1.3円）の安宿に滞在しながら、ミルクティーが7Rsという物価のタメルで、金に糸目をつけない生活続ける彼が、私の目にはちぐはぐに映った。だが同時に、「贅沢」な「貧乏旅行」を楽しむ彼が、新しいタイプのバックパッカーのようにも思えた。

今回タスローがネパールにきた目的は、沈潜して、まさにこのような自暴自棄的生活を堪能するためだった。彼は過去に2回ネパールを旅したことがあり、その時に接したネパール人の人柄に惹かれ、以来この国がお気に入りになったのだという。「素朴」、「親切」、「やさしい」という言葉は、多くの

日本人バックパッカーがネパール人を表現するときに頻出するが、タスローもネパール人の人柄に魅了された一人だった。ただしネパール人に対するこのような感情が、ネパール人との交流には直接的には結びつかないところが彼の特徴でもあった。

旅で現地の人と話をするのが楽しいとか、旅に出たら現地の人と会話しろよとか、そういう奴いますけど、俺はやっぱり日本人と話すのが一番楽しいですね。話が通じるし、笑いのツボっていいのか、そういうものも一緒だし。じゃあ、旅に出なくて日本にいたらいいじゃんっていうものもあるけど、やっぱり違うんですね。(2009年8月／カトマンズ)

タスローは、これからどこへ行くか、カトマンズにいつまでいるか、いつ日本に帰国するのか、まったく決めていないと常々語っていた。しかしある日突然、タスローは「3泊4日でタイのビーチに行ってくる」と言ってバンコク行きの飛行機に飛び乗った。空港に向かうタクシーに乗り込む際に「すぐにカトマンズに戻ってきて、それからエジプトに行くか、それともカトマンズでネパール料理の学校へ通うことにする」と言い残して機上の人となったのだが、彼は戻ってこなかった。そのまま忽然と姿を消したのである。

タスローとはもう二度と会うことはないのだろうと思っていたのだが、調査を終えて帰国した私に彼がメールを送ってきてくれた。そこには「就職活動がうまくいかず、心身ともに疲れていたのですが、旅に出てリフレッシュできました。もう少し休養してから、就職活動を再開しようと考えています」という内容が書かれていた。仕事をしなくとも十分生活できる経済力があるにもかかわらず、「仕事をする」ことにこだわり続ける彼の「心」が彼の「心身」を苦しめていた。私が感じた彼の葛藤の根源は、これだったのである。

(2) ^{さるがんせき}猿岩石²⁾を理想化するトモ

トモ(1971年生まれ/男性)も、私が聞きとりをした時点で、カトマンズで1カ月以上沈潜していたバックパッカーだ。彼ともアティティ・ツアーズで知り合った。15年間務めた病院を退職し、2009年4月に船で日本を出国したトモの旅は韓国、中国、そしてネパールで3カ国目になる。5カ月で3カ国しか進まない超スローペースの旅を実践する彼は、典型的な沈潜型だといえるだろう。

猿岩石に大きな影響を受けたというトモが仕事を辞めたのには、病院で日常的に接しなければならない人間の生死が深く関係していた。

病院にいると毎日救急車で運ばれてくるんですよ。そういう患者さんを見てると、やっぱりやりたいことをやっとなないとあとから後悔すると思って。自分は全然悪くないのに事故に遭ったりすることだってあるし、そうになったらもう、できないですもんね。俺もそろそろ40になるんで、やっぱり歳とったらもうできないなあと。(2009年8月/カトマンズ)

トモは無期限世界一周を目指していた。15年分の貯金があるので旅を急いでいないというのがカトマンズで沈潜している理由でもあるし、長旅の疲れがでたのか、カトマンズに到着したときにひいた風邪がまだ完治しないというのが、出発をためらう理由でもあった。

ラサからネパールに入ったとき1カ月ビザを取ったんで、それは居ようと思ったんですよ。3日くらい滞在してそのあいだに嫌な目に遭ったら、その町のこと、ずっと嫌いなままでしょう。だけど長く居るといろんなものが見えてくると思うんですよ。今も毎日知らない道を歩いてみると「あ、ここにこんな店があるんや」って思いますからね。だけど「毎日何をしているの?」って聞かれるのが嫌になるくらい何もしてないですね。旅じゃな

くて、もう生活してますよ。(2009年8月/カトマンズ)

トモはバックパッキングでは通過儀礼の観さえあるドラッグや買春というような「逸脱的」な異文化体験には、全然興味がないようだった。彼はタスローと違って、「散財」もまったくしなかった。彼はひたすら町を歩き、アティティ・ツアーズに顔を出しては自身のブログの更新(旅日記)に勤しんでいた³⁾。土産屋を冷やかしたり、流通量の少ないネパールの紙幣を偶然見つけると、いつまでも興味深く眺め続けるトモの姿を見かけるたびに、「几帳面に旅をしているなあ」という思いが私のなかに積もっていった。

「猿岩石にはすごく影響されて、そのあとで沢木耕太郎を読んだんですよ。その影響が大きくて、世界一周するんだったら、資金的にはアメリカから回ったほうが楽なんですけど、どうしても西回りになっちゃって」、「まだ一回も飛んでない。ずっと陸路です」⁴⁾(2009年8月/カトマンズ)というトモの語りや、私が見た彼の毎日の行動から、猿岩石や沢木という旅人の理念型をトモがしっかりもっていて、「自分も、彼らと同じような旅をするのだ」という信念のようなものがあるのだろうという思いを強くした。

このように日本人バックパッカーが沈潜する理由は個々人で異なっているのだが、カトマンズが沈潜地として選択される理由の一つは、物価の安さにあることは間違いがない。切り詰めれば1日500円以下で生活できてしまうタメルは、人柄がいいというネパール人の評価も手伝って、沈潜するには絶好の地なのである。

彼らのような沈潜者が、タメルにやってきた新参バックパッカーと親しくなることで、沈潜者に旅の情報が集積されていく。一方、沈潜者と会話した新参バックパッカーは、沈潜者からの情報を基にして今後の旅の方針を決定していく。このような相互行為を自動的に繰り返すことで、たとえ沈潜者がタメルから移動していったとしても、情報だけは、残された者に引き継がれながら蓄積され続けていくのである。

5. 定宿化という相互依存

では、タメルでの沈潜生活を満喫している彼らは、日常の拠点となる宿泊場所をどのように決めているのだろうか。

タメルには130軒あまりのゲストハウスがあるが、日本人バックパッカーは無秩序に宿泊しているわけではない。彼らは特定の安宿に集中する傾向があり、2009年の時点では、「ホーリーランド」(写真4)を筆頭にして「スイートドリーム」や「ムスタン」という安宿に多くの日本人バックパッカーは滞在していた⁵⁾。

日本人バックパッカーが特定の宿に集中するという現象は、合理的に説明することができる。以下ではそのメカニズムを探っていくが、その前に、多くの日本人バックパッカーが愛用しているガイドブック『地球の歩き方』では宿の紹介がどのようになされているのかを確認しておこう。



看板はもちろん日本語で書かれてある。ここが文字どおり、タメルにおける日本人バックパッカーの拠点である。現在は、この写真の場所から徒歩1分ほどの場所に移転している。(2005年7月27日、筆者撮影)

写真4 ホーリーランド・ゲストハウス

日本人の場合、高級ホテルを志向するツーリストは、ホテルの設備や雰囲気重視する傾向がある。「随所にネパールの伝統様式が取り入れられ、彫像が置かれたロビーもすばらしい」、「レンガ造りの建物を飾るのは、ネワールの伝統工芸品である木彫の窓枠や柱」というように、『地球の歩き方』が異国情緒漂う高級ホテルの雰囲気をことさら強調していることからそれは理解できる（『地球の歩き方』編集室 2005：66-79）。

一方、バックパッカーの場合は、インテリアや雰囲気は二の次となり、別の要素がそれにとってかわる。それは「無料で空港まで迎えに来てくれる」、「日本食レストランの割引券がもらえる」（『地球の歩き方』編集室 2005：71-74）などの実利的な要素である。

また、日本からタイを経由して中国に入り、シベリア鉄道でモスクワに至り、そこからヨーロッパを経てアジア横断を果たしネパールにたどり着き、スイートドリームに連泊していた移動型バックパッカーのユウタ⁶⁾（1982年生まれ／男性）が「ここは日本人のたまるところ、ないですねえ。ゲストハウスの1階とかなんにもないでしょう。椅子とかあったらのんびりできるけど」（2005年8月／カトマンズ）と嘆いていたように、他者との情報交換が自己の旅の遂行に欠かせない現代型バックパッキングでは、出会いの場であるフリースペースの有無が宿泊場所を決定する鍵になることもある。

現在、タメルで、日本人バックパッカーのたまり場になっている「お客さんの99パーセントが日本人」という旅行代理店アティティ・ツアーズは、看板に「日本語の本7000冊ただ読み歓迎」と謳い、自由に飲むことができるコーヒーとソファやテーブルを用意し、インターネットが無料で接続できる環境を整えている。トモをはじめとして、パソコンを持って旅をしている日本人バックパッカーは、マンガを読み、あるいはインターネットをするために、一日に何度も足繁くアティティ・ツアーズに通っていたが、こうして彼らは自動的に他のバックパッカーと情報交換を始め、行動を共にし始めるばかりか、移動するときのチケットをここで買うようになるのである。店の

経営者が日本人バックパッカーの習性を熟知し、それをビジネスに利用しているのだ。そしてこのような総合的な居心地の良さが、沈潜型バックパッカーの長逗留と、それに連動したバックパッカー・コミュニティの形成に繋がっていくのである。

コミュニティの基盤となる宿泊場所を決める際に、日本人バックパッカーが重要視するのは、宿のスタッフの日本語能力と人柄である。スタッフの日本語能力とパーソナリティは、タメルでは以前から日本人バックパッカーの最大の関心事であり続けている。たとえば『地球の歩き方1987～88年度版』のタメル地区の安宿のインフォメーションでは、「日本語を話す」、「日本語ですべてOK」というような日本語の会話能力と、「スタッフもGood!」、「宿の人たちはみんな親切」というように、人柄の良さを強調する文章が溢れかえっている（地球の歩き方編集室 1987：147-150）。

この傾向は20年後の『地球の歩き方2007～08年度版』でもまったくかわっていない。「日本語がぺらぺら」、「日本語が上手」という日本語能力と、「とても誠実な人」、「みんな親切」という人柄に言及している文章がひととき目立っている。具体的には、掲載されている18軒の安宿情報のうち7軒がスタッフの日本語能力、9軒がスタッフのパーソナリティについて言及されている。掲載されている10軒の高級ホテルのインフォメーションには、それらの要件がまったく書かれていないことは実に対照的だ（『地球の歩き方』編集室 2007：78-85）。

このように日本人バックパッカーは宿泊場所を選択する際に、宿のクオリティやコスト・パフォーマンスよりも、日本語によるコミュニケーション能力とスタッフの人柄をより重視する。英会話が苦手という日本人バックパッカーが抱えるコンプレックスをここからも垣間見ることができるが、このような特性が多く日本人バックパッカーが英語で書かれた *Lonely Planet* ではなく『地球の歩き方』を持って旅をしていることにも繋がっている。

実際のところ、『地球の歩き方』と *Lonely Planet* の宿に対する評価基準

はずいぶん異なっている。*Lonely Planet* のネパール編でゲストハウスの評価のポイントになるのは、「質素だが清潔 (basic but clean)」というような宿のクオリティと、「唯一の難点は、周囲のレストランやバーが喧しいこと (The only drawback is the noise from the surrounding restaurants and bars)」というような周囲の環境を加味したうえでくださる「妥当な料金 (reasonable price)」というコスト・パフォーマンスなのである。*Lonely Planet* に掲載されているタメルの安宿13軒のうち、従業員の英会話能力について言及されているものは皆無であり、スタッフの人柄についても「助ける人びと (helpful people)」と書かれてある1軒だけにすぎない (*Lonely Planet* 1999: 164-165)。『地球の歩き方』が強調するようなスタッフのコミュニケーション能力や人柄を、*Lonely Planet* はまったく重視していないのである。

6. ある日本人宿の誕生

スタッフの日本語能力とパーソナリティが宿泊場所の選定の重要な要素になることは、日本人バックパッカーが集中する安宿の歴史の変遷をみても確認できる。タメルで現在、日本人バックパッカーに人気がある宿のナンバーワンはホーリーランドである (『地球の歩き方』編集室 2005: 73)。1994年に開業したこの宿の歴史は、パラシュラム (1956年生まれ / 男性) が、94年に81.75㎡の広さの土地を70万 Rs (94年当時、1Rs = 約2.2円) で購入したことで始まった。タメルの観光産業に大いなる可能性を感じていたパラシュラムは、それに参入することで経済的に成功することを夢見ていた。

大きな資本を持っていなかった彼は、まとまった金ができるたびに一部屋ごと建築していくという方法で、94年に、ようやく開業にこぎつけた。オープン当初のホーリーランドは「イスラエル人バックパッカーのたまり場だった」⁷⁾ という。ところが95年にパラシュラムがバルクリシュナ (1975年生

まれ／男性)を客引きとして雇い入れたことによって宿の客層は一変した。

1995年にバルクリシュナを雇ったんだ。バルクリシュナは別のゲストハウスで働いていたが、そこを「辞めたい」というので「それじゃあうちへ来いよ」といったんだ。いつも顔は見ていて性格のいい真面目な人間だと思っていたんだ。(2009年3月／カトマンズ)

バルクリシュナを雇ったのは、彼の生真面目な性格を買ったからであり、彼が流暢に話す日本語が目当てではなかったという。なぜならイスラエル人バックパッカーだけで、宿は十分に採算がとれていたからである。

貧村で生まれ育ったバルクリシュナは、少年のころに学校もそこそこに町に出て来て以来、観光ガイドや客引きなど観光産業にかかわりながら厳しい生を生き抜いてきた。バルクリシュナは、猛烈な勢いで増加してきた日本人バックパッカーを生活の糧にすることが自分の可能性をひろげる唯一の方法だと確信し、そのためには日本語の会話能力を上げる必要があると日本語学校にも通ったこともある、緻密な計算ができる少年だった。その彼がホーランドに雇われるとすぐに、ほぼ完璧に日本語が喋れるという特技を生かして日本人バックパッカーをどんどん宿に引っ張ってきたのである。

しかし、バルクリシュナが日本語の習熟に熱心だったのは、決して仕事だけが目的ではなかった。彼には日本語能力を利用したもう一つの野望があったのだ。

日本人と結婚したかったのが一番。お金もほかの問題も日本人は助けてくれるから、日本人女性はネパール人に人気がある。日本人のほうが愛しやすいです。みんなネパール人は日本の女の人と結婚したいと思っています。そうすればいろいろな問題、お金とか、いろいろな問題が全部助かるから。(2009年3月／カトマンズ)

バルクリシュナの願望は、まもなく成就された。彼はホーリーランドで客引きをしているときに日本人女性と知り合い1997年に結婚するのである。彼女と日本へ帰国して、念願だった新たな人生をスタートさせたバルクリシュナは、これで彼が抱えていた「いろいろな問題」から解放されるはずだった。

バルクリシュナの結婚の直前に、ネトラ（1979年生まれ／男性）がバルクリシュナに誘われてホーリーランドで働き出したことは、ホーリーランドのもう一つの僥倖だった。当初、ネトラは日本語をまったく理解できなかったが、努力家だったことが幸いし、短期間で日本語能力を上達させて多くの日本人バックパッカーを宿に連れてくる優秀な客引きに成長していった。

ところが、順調な展開をみせていた日本人宿としてのホーリーランドは、ある事情をきっかけにして大きく瓦解してしまう。病気になった母親の看病に専念するために、パラシュラムがゲストハウスの経営を断念せざるを得なくなってしまうのである。彼にかわって、会社員である二人の息子が協力してしばらくのあいだ経営に携わっていたのだが、片手間仕事ではうまくいくはずもなかった。そしてパラシュラムは、彼の窮状を聞きつけて「宿を賃貸してほしい」と申し入れてきた知人の頼みを受け入れる決断した。こうしてホーリーランドは、2001年に新オーナーのもとで再出発することになった。

しかしまもなく、ネトラは新オーナーと意見が合わず、ホーリーランドを辞めてムスタンに移っていった。ネトラと同様に新オーナーの経営方針についていけなかったハリー（1981年生まれ／男性）も、ホーリーランドを辞めたスタッフの一人だった。ホーリーランドで日本語を学び、一人前の客引きになった彼は、経営者がかわるやいなやスイートドリームに移っていった。

ムスタンとスイートドリームは、ネトラとハリーが働きだす以前は、日本人バックパッカーにはまったく馴染みのない宿だった。ところがネトラとハリーがホーリーランドに宿泊していた日本人バックパッカーたちを、自分が勤めだしたゲストハウスに引き抜き始めたのである。その過程をネトラは「それまでは、ムスタンは日本人全然いなかったけど、僕がここにきて、僕の友

達、そしてクチコミ、クチコミで今は日本人ばかり」(2005年8月/カトマンズ)と表現し、ハリーは「それまでは、ここには日本人全然いなかったけど、僕の友達を僕が連れてきたですよ」(2005年8月/カトマンズ)と語った。

日本人と結婚するという夢を実現して幸福を掴んだはずのバルクリシュナも、まるでホーリーランドの空中分解に歩調を合わせるように、あっけないほど短い時間で夢から目覚めさせられることになった。バルクリシュナが日本に渡った当時の日本社会は、バブル崩壊後の「失われた10年」とまでいわれた厳しい社会状況にあり、若い二人が希望するような職業に彼が就ける可能性はなかった。経済的な理由で日本人との結婚を望んだバルクリシュナの日本での新生活は、皮肉にも経済的な理由が発端となって破たんへの坂道を転がり落ちていった。

2002年にネパールにたった一人で失意の帰国をしたバルクリシュナには、残酷にもできる仕事は一つしかなかった。こうして彼は再びタメルで客引きとなった。現在でも日本での生活について多くを語りたがらないバルクリシュナではあるが、帰国以来続いている彼の不安定な精神状態は、日本で味わった苦難と葛藤がいかに大きかったかを物語っている。

一方、日本人宿という経営戦略が崩壊したと思われたホーリーランドは、2008年に移転したものの現在でも多くの日本人で賑わっている。『地球の歩き方』やクチコミ効果で、「日本人が集まる」という評判が日本人バックパッカー・コミュニティですっかり定着していたのと、日本語の会話能力の高い新たなネパール人スタッフを雇ったのが功を奏したのである。新しいスタッフは、毎日空港に行っては客引きに精を出す真面目な少年だ。

ホーリーランドの日本人宿化に大きく貢献したハリーは、タメルで出会った日本人バックパッカーと結婚して2007年に日本へ移住していった。こうして彼もバルクリシュナと同じく、夢を掴むことに成功したネパール人の一人になった。ハリーが去ったあとのスイートドリームは、新たに日本語の会話能力の高いスタッフを雇うことはせず、日本人宿からの経営転換を模索中

である。

さらに、一時はタメルでの観光業から撤退を余儀なくされていたパラシュラムは、ホーリーランドの賃貸契約を終了させてタメルに戻ってきた。彼は帰国したバルクリシュナと、ムスタンにやってきた新しい経営者についていけず観光産業に嫌気がさして故郷に戻っていたネトラに声をかけて再雇用し、ゲストハウスの名前も一新して再スタートを切った。

こうして一つの宿を中心にして生まれた個人史のそれぞれは、再び成功物語に向けて新たな一歩を踏み出したのである。

7. 日本人宿の形成メカニズム

ネパールの観光戦略がユニークなのは、外貨獲得のためにヒッピーやバックパッカーなど、ともすれば当該国にとっては「迷惑」なツーリストまでも積極的に取り込もうとした点にある。実際、ヒッピーたちの行動は世界各地でトラブルになっていた⁸⁾。

しかしネパールは、トラブル・メーカーという烙印を押されていたヒッピーやバックパッカーを忌避するどころか大歓迎した。ネパールの「ドラッグに寛容」という評判は、そのようなネパールの観光戦略をよく表している。バックパッカーはドラッグという陶酔とスリルを味わうことができたし、ネパール社会は彼らによって経済的な利益を得ることができたのである。両者の利害関係が一致することで、バックパッカーの増加に拍車がかかり、ネパールはますますバックパッカーの聖地と化していったのだ。

このような国家プロジェクトともいうべきマクロな要因によってバックパッカーの楽園へと変貌していったネパールであったが、日本人宿の形成には、個人的な思惑というミクロな要因が大きく作用していた。具体的にいうならば日本人宿の生成には、バルクリシュナらの例でみられるように、スタッフの日本語の会話能力と人柄という二つの要素が強く関連していたのである。

これらの要素の背後には、それを誘発する独自の給料システムがある。たとえばネトラのムスタンにおける基本給は、宿の掃除やレセプションなどの雑務までこなして1カ月にわずか1,200Rsにしか過ぎなかった(調査日2005年8月。1Rs = 約1.5円)。タメルの両替屋で働く同年代の若者の給料の「25USDくらい(約1,756Rs)」(調査日2005年8月。1USD = 70.25Rs)と比較して、ネトラの給料は格段に低い。だがそのかわりに、歩合給がつく。宿のスタッフが自由時間を見つけては空港やバス・ターミナルへ行って客引きをしているのは、宿泊客を連れてくるたびに相応の金額がキャッシュバックされるからだ。すべてのゲストハウスが同じではないが、客が1泊の場合は宿泊料の半額、2泊以上した場合は1泊分の金額が一般的な歩合である。宿の雑用もこなすにせよ、あるいは客引きだけで生計を立てるにせよ、生きていくためには相当のハードワークが必要なのである。そして宿に引っ張ってくる客には、可能な限り2泊以上してもらうように努力＝サービスして、歩合給を上げる必要がある。もちろんサービスは、日本語による会話から始まる。日本語の安心を求めるバックパッカーにとって、相手が日本語話者なのは何にもましてありがたいことなのだ。

すなわち日本語の会話能力を向上させることは、客引きがタメルで生きていくうえでの必須条件なのである。一方、日本人バックパッカーは、客引きとの人間関係を築くことで居心地が良くなり、沈潜へのきっかけになる。こうして彼らは、一つの宿で長期滞在し始める。そしてそれが日本人コミュニティの生成へと繋がっていくのである。日本人バックパッカーと客引きとは、いわば共存共栄の関係にあるのだ。

したがってバルクリシュナの登場から始まるホーリーランドのイスラエル人から日本人の定宿への変化は、決して偶然に起こったのではなく、生活の必要に迫られて起こるべくして起こったといつてよい。ムスタンとスイートドリームの日本人の定宿化と衰退も同様の原理が働いている。

もちろん、スタッフにとっては経済的利得、日本人バックパッカーにとつ

ては日本語の安心という相互依存だけで両者の関係が構築・維持されているわけではない。両者は滞在中に一緒に食事や飲み、あるいは近郊に遊びに行ったりと、利害関係を度外視した付き合いをしている場合も多い。しかしそのような友達付き合いは、個人の利害を度外視しているゆえに、なおさら「親切」というもう一つの評価基準として宿の評価にかえてくる。ゲストハウスに絶大な魅力があるのではなく「スタッフに客がついている」と言われるのはそういう意味である⁹⁾。そしてその評判は、日本人バックパッカーの移動とともに世界各地に発信され、スタッフのもとへプラスの効果をもたらしながら回帰してくる。

すなわち日本人宿の形成には、高いクオリティと安い宿泊料という誰もが要求する条件が必要不可欠なのは当然ではあるが、それ以上に「日本的である」ということが重視される。*Lonely Planet* が積極的に異文化を志向する、つまり外交的なスタンスをとっているのに対して、『地球の歩き方』は異文化への志向というよりも「日本的なもの」を求めているという点できわめて内向的である。つまりコーエンが指摘したバックパッカーの特徴である「現地の文化に浸る」(Cohen 1972: 165-182) 気は、日本人バックパッカーにはほとんどない。日本文化に浸りながら異文化を旅することが日本人バックパッカーの望みにほかならず、その要望に沿うかたちで『地球の歩き方』も構成されている。

もっとも、『地球の歩き方』の情報源の多くは日本人バックパッカー自身なのだから¹⁰⁾、それは当然の帰結である。「常道をはずれ」て「現地の文化に浸る」ことがバックパッキングの理念ではあるものの、そのような表象とは裏腹に自文化に包まれながら異文化を味わいたいという屈折した欲望を彼らは強くもっているのだ¹¹⁾。日本人宿が形成されるという事実こそが、それを雄弁に物語っている。

日本人バックパッカーがゲストハウスに要求する日本語の安心と親切心という要素は、宿に固有に備わっているのではなく、スタッフの人間性に内在

しているものである。しかも雇用関係が不安定で従業員の流動性が高いネパールでは、日本人宿の隆盛と衰退のサイクルが必然的にはやくなる。このような不安定な要素のうえで絶妙なバランスを取ることで、タメルの日本人宿は成立していたのである。

思い起こせば、バックパッカーズ・タウンとしてのタメルの成立には、ベルリンの壁崩壊や、日本における観光形態の多様化というような世界規模の社会変動が根底で大きく影響していた。そのような、ダイナミックな変化が社会の末端で生を営む人々の意識や価値観の変化をもたらすことで、個人的な営みであるはずのバックパッキングは、コミュニティが形成されるという集団的な現象へと変貌していったのである。

8. むすびにかえて―「自己にとっての主体性」がきりひらく地平

まず本稿は、ネパールの近代化を観光史からとらえなおした。ネパールが開国を決断した1951年以降、観光によって国家の近代化を果たすという目論見は、ネパールには日・欧米人観光客を引きつける魅力的な観光資源に満ち溢れていたという意味での射た国家戦略だった。ヒマラヤの高峰、多くの宗教が交り合って醸し出される神秘性、世界遺産にも登録された希少な動物が生息しているチトワン国立公園など、ユニークな文化と自然がこの国には充満している。こうした観光立国を目指す政府方針が的中したことによって、ネパールは「アトラクションの中心地」(National Planning Commission 2005b)、「世界でもっとも重要な観光地」(National Planning Commission 2005c)という地位を確立したのである。

ネパール社会の変遷を踏まえたうえで、個人的な実践であるはずのバックパッキングが集団化し、旅のルートの結節点でバックパッカー・コミュニティがいかに形成されていくのか、そのメカニズムの解明を試みた。バックパッカー・コミュニティの生成を誘発するのは、ホスト社会で観光産業に従事

している人々の生活戦略である。なかでも特に重要なのが、ゲストハウスの給与システムだ。彼らはバックパッカーを呼び込むために、日本語の習得に励み、日本人バックパッカーとのコミュニケーションに勤しむ。

その第一義的な目的は、歩合による収入の増加にあるのだが、それだけではなく、なかには経済的な苦難から解放されるための手段として日本人との結婚を目論む者もいる。このような彼らのトータルの生活戦略によって、日本人バックパッカーはタメルの居心地がよくなり、沈潜するようになる。それがバックパッカー・コミュニティの形成へと繋がっていき、旅の標準化へと結びついていく。

一方、日本人バックパッカー側にもコミュニティが生成されるような旅の実践が確認できた。その最たるものは、沈潜を志向するバックパッカーの存在である。沈潜型バックパッカーの旅の実践は、移動型バックパッカーのそれとは大きく異なっており、彼らの「動かない旅」がバックパッカー・コミュニティの形成に結びついている。

バックパッキングの標準化を象徴しているタメルの発展に、沈潜型バックパッカーは少なからぬ役割を果たしていた。客引きの日本語能力や人柄といった微細な要素を端緒として、沈潜型バックパッカーは日本人コミュニティを生成する契機をつくる。彼らが、出会った旅人と何気ない会話をすることで旅の情報が空間に蓄積され、コミュニティ全体が情報の共有装置になる。それがまた、その情報を求めて世界各地から日本人バックパッカーを呼び寄せる契機をつくる。なぜなら多くの日本人バックパッカーが、日本的なるものに包まれながら異文化を消費したいという屈折した欲望を抱き続けているからだ。端的に言えば、彼らは、「放浪」という冒険を「安全」に経験したのである。

こうして自然に出来上がった日本人バックパッカーの円環が、ホスト社会に生きる小資本家たちによるさらなる投資をタメルに呼び込み、貧村からバルクリシュナのような少年たちが自己実現を目指してタメルに集結するとい

うような現象を起動させ、タメル全体の発展に繋がっていく。何重にも重なり合ったサイクルが構築されることによって、タメルの日本人コミュニティは日々メンバーを更新しながらも維持されており、連動してタメルも変化しているのである。そしてこれら一連のプロセスが、バックパッキングの標準化へと連続しているのである。現地社会に生きる人びととバックパッカーの、ベクトルの異なった思惑がある局面で一致することで、放浪の旅が標準化の道を歩み始めるのである。

バックパッキングのオルタナティブ・ツーリズムとしての可能性は、もはやほとんどないわけだが、だからといって現代型バックパッキングに否定的な眼差しを向けるのは的外れである。なぜなら、たとえバックパッカーが旅の標準化に自ら進んで拍車をかけていたとしても、バックパッカーが旅の主体性を掌握しているという構造はいまだに維持されているからである。

カトマンズを出ると、インドかチベットに向かうバックパッカーが多いのだが、これらのルートはいずれもビザの取得も含めて完全にパッケージ化されている。このようなパッケージ化されたルートを旅人の自由な意思によって自在に組み合わせ、自分だけのオリジナルな旅を作り上げていくのが現在のバックパッキングの主流となっている。

だが思い起こせば、そもそもカトマンズにやってくる決断をしたのも、カトマンズの日本人宿に宿泊したのも、カトマンズで他の日本人から情報を取得して今後のルートを決断したのも、すべてバックパッカー自身だった。つまり放浪が標準化されるなかで発揮される主体性こそが、彼らにとっての主体性なのである。そして、たとえ標準化という構造から与えられた主体性であったとしても、バックパッカーは主体性にまぎれもない真正性を実感することができるのだ。こうして確保された「自己にとっての主体性」をおおいに発揮しながら、異文化という自己を強烈に実感できる環境に深く身を沈めることで、タスローのような葛藤を抱える旅人が「苦悩から解放」されたり、トモのような「やりたいこと」に強くこだわる旅人が「やりたいこと」に没

頭することで「生の充実感」を得ることができるのである。

現代型バックパッキングは、コーエンが「発見」した1970年代のバックパッキングとはすっかり別物になってしまったが、標準化した放浪が創造する旅の新たな面白さは、バックパッカーだけでなく現地で苦難の生を営む人々にも、生の原動力を付与し、生の新たな可能性をもたらしてくれるのである。

注

- 1) この4条件は、日本で初めてのバックパッキング用ガイドブック『地球の歩き方』の第1号『地球の歩き方② アメリカ』（ダイヤモンド・スチューデント友の会 1979）で掲げられたものである。ただ現在では、バックパッカー人口の増加にともなって、短期間の旅行や、高級ホテルに宿泊するなど、多様なバックパッカーが出現してきており、「バックパッカー」を定義することができなくなっている。
- 2) 社会学者の新井克弥は 1996年に日本社会にバックパッキング・ブームを巻き起こした出来事があったと指摘している（新井 1999）。この年、テレビバラエティ番組の企画で猿岩石という2人組のコメディアンが、197日をかけて、香港からロンドンまで、ヒッチハイクでユーラシア大陸横断をやり遂げたのだ。いうまでもなく、猿岩石の旅のモデルは90年代のバックパッカーの「バイブル」とさえいわれた『深夜特急』（沢木 1986）の著者沢木耕太郎なのだが、この「新たな試み」が日本社会に大反響を呼び起こしたことは人々の記憶に新しい。新井によれば、猿岩石の旅をきっかけにして、バックパッキングという旅行形態が改めて一般に認知され、バックパッカーが急増していったという（新井 1999）。
- 3) トモのような、「貧乏旅行」の体裁をとりながらも、高価な IT 機器を駆使しながら旅をする旅人を、「フラッシュパッカー」（Hannam and Diekmann 2010 : 1-7）と呼ぶ研究もある。ネット空間から旅の情報を収集するとともに、そこに自分の経験を書きこむことで、それが最新の情報となって流通していく。ネット空間でも情報の共有化が進んでいるのである。
- 4) 飛行機には乗っていないという意味で、バックパッキングでは高い価値と意味がある。
- 5) 2005年7月～8月に行った調査では、これらのゲストハウスの宿泊料は、ドミトリールが75～85Rs、シングル（トイレなし）が100～120Rs、シングル（トイレあり）が150～220Rsだった。なお、日本人宿の確定に際しては、聞き取りとガイドブックを参考にしながらタメルのゲストハウス35軒を調査した。
- 6) ユウタ。高校卒業後に就職。2004年に退職し、05年2月に旅に出た。
- 7) ホーリーランドの従業員だったネトラへの聞き取りから（2005年8月／カトマンズ）。ネトラは1979年生まれ。男性。19歳の時、親戚のバルクリシュナを頼ってカトマンズ

にやってきた。

- 8) 1971年2月にはインドネシアが「あまりに異様な服装」と暴力事件を起こしたという理由から、今後ヒッピーには入国査証を与えず徹底的に締め出す方針を打ち出した(朝日新聞 1971年2月2日)。また74年にはマレーシアの観光地ペナンで、見苦しい服装や乱れた髪型が青少年に悪影響を与えるとして、マレーシア政府がヒッピーと判断した94人を逮捕し国外追放している(朝日新聞 1974年4月2日)。
- 9) 実際、2005年8月には、毎夏カトマンズを訪れるというハリーの「友達」の日本人バックパッカーが、3年連続でスイートドリームに宿泊していた。
- 10) 『地球の歩き方② アメリカ』1980年度版には「この本は、毎年、春・夏の休みに、アメリカに1ヶ月間の取材旅行に行くダイヤモンド・スチューデント友の会のスタッフと、78夏、79春の休みに、1カ月のアメリカ自由コースに参加した約500人の体験者の協力で作られた」(ダイヤモンド・スチューデント友の会 1979)と記述されている。また初期の『地球の歩き方』には、情報募集の「お願い」とともに、原稿用紙が添付されていた(地球の歩き方編集室 1987: 343-344)。なお、バックパッキング専門のガイドブックだった『地球の歩き方』は、現在、一般的なガイドブックへと性格を変えている。『地球の歩き方』の歴史や変化については山口・山口(2009)に詳しい。
- 11) 自文化に包まれながら異文化を味わいたいというツーリストの欲望を満たす装置を、ダニエル・ブーアステインは「環境の泡 (environmental bubble)」(ブーアステイン 1968)と呼んだ。

参考文献

- 朝日新聞 (1971) 1971年2月2日、1974年4月2日。
- 新井克弥 (1999) 「スズメシリーズ 自分知るならバックパッカーのスズメ 第3回 バックパッカーの変遷」『読売新聞』1月22日。
- 大野哲也 (2007) 「商品化される『冒険』—アジアにおける日本人バックパッカーの『自分探し』の旅という経験—」『社会学評論』58 (3): 268-285。
- 沢木耕太郎 (1986) 『深夜特急3 インド・ネパール』新潮文庫。
- 下川裕治 (1997) 『12万円で世界を歩く』朝日文庫。
- ダイヤモンド・スチューデント友の会 (1979) 『地球の歩き方 ② アメリカ』ダイヤモンド・ビッグ社。
- 地球の歩き方編集室 (1987) 『地球の歩き方 ネパール』ダイヤモンド・ビッグ社。
- 「地球の歩き方」編集室 (2005、2007) 『地球の歩き方 D29 ネパール 2005~2006年版』ダイヤモンド社。
- 古川彰・松田素二 (2003) 「序章 観光という選択—観光・環境・地域おこし」古川彰・松田素二 (編) 『観光と環境の社会学』1-30、新曜社。
- ブーアステイン、ダニエル (1968) 『幻影の時代: マスコミが製造する事実』後藤和彦・星

- 野郁美訳、東京創元社。(Boorstin,J.Daniel,1962,*The Image:Or,What Happened the American Dream*. NY:Penguin)
- 山口さやか・山口誠(2009)『「地球の歩き方」の歩き方』新潮社.
- Adler,Judith (1985) 'Youth on the Road: Reflections on the History of Tramping,' *Annals of Tourism Research* 12 (3) : 335-354.
- Cohen,Erik(1972) 'Toward a Sociology of International Tourism,' *Social Research* 39(1) : 165-182.
- (1973) 'Nomads from Affluence Note on the Phenomenon of Drifter-Tourism,' *International Journal of Comparative Sociology* XIV : 89-103.
- Hannam,Kevin and Diekmann,Anya(2010) 'From Backpacking to Flashpacking :Developments in Backpacker Tourism Research,' *Beyond Backpacker Tourism Mobilities and Experiences*. Bristol:Channel View Publications,1-7.
- Lonely Planet (1999) Lonely Planet Nepal 4thedition.
- Ministry of Culture,Tourism and Civil Aviation (2004) *Nepal Tourism Statistics*. HMG.
- Morimoto,Izumi (2007) 'The Development of Local Entrepreneurship: A Case Study of a Tourist Area, Thamel in Kathmandu,' in Ishii,Gellner, and Nawa, eds., *Nepalis Inside and Outside Nepal: Political and Social Transformations*. Delhi:Manohar, 351-382.
- National Planning Commission HP (2005a) *The First Plan 1956-1961*. <http://www.npc.gov.np> (2005年9月8日閲覧)
- (2005b) *The Third Plan 1965-1970*. <http://www.npc.gov.np> (2005年9月8日閲覧)
- (2005c) *The Sixth Plan 1980-1985*. <http://www.npc.gov.np> (2005年9月8日閲覧)
- Riley,Pamela J. (1988) 'Road Culture of International Long-Term Budget Travelers,' *Annals of Tourism Research* 15 (3) : 313-328.
- Thamel Tourism Development Board (2005) *TTDB News Bulletin Tourism Information of Thamel*.
- Urieli,Natan., Yonay,Yuval and Simchai,Dalit (2002) Backpacking Experience: A Type and Form Analysis,' *Annals of Tourism Research* 29 (2) : 520-538.
- Vogt,Jay W. (1976) 'Wandering: Youth and Travel Behavior,' *Annals of Tourism Research* 4 (1) : 25-41.